

# バレンボイム／サイド 音楽と社会

日 朝  
04 (H16) 5  
9. 5

Parallels and Paradoxes

D・バレンボイム、E・W・サイド [著]

【評者】青柳 いづみこ (ピアニスト・文筆家)

エルサレム生まれのパレスチナ人と、十歳でイスラエルに移住したユダヤ人といえは、一般的には不倶戴天の敵同士という構図だろう。しかし、哲学者サイドと音楽家バレンボイムは一九九〇年代に出会って以来、急速に親交を深め、音楽と政治、文化についての対話を重ねてきた。その精髓をまとめたのが本書で、二人の「相似」と「相反」にスポットが当てられている。二人に共通しているのは、フルトヴェングラーへの熱狂だ。一九五一年、十六歳のサイドは、カイロで聴いたフルトヴェングラーに魅了

## 「相反」を認めつつ「相似」深める

された。三年後、十一歳のバレンボイムはフルトヴェングラーの前でピアノを弾き、ベルリン・フィルとの協演を提案されている。しかし、両親はそれを断った。戦争とホロコーストが終わって九年しかたっていないからだった。この拒絶を残念に思ったというバレンボイムは、エルサレムでワグナーを指揮するなど、イスラエル社会のタブーを破りつつつけてきた。一九九九年には、サイドの協力を得てワイマールでワーグナーを指揮し、アラブとイスラエルの若い音楽家たちを集結させている。

二人が見解を異にするのは「ホーム」に対する感覚だ。サイドの最も古い記憶は「ホームシックの感情」だった。いっぽう、音楽という世界言語を操るバレンボイムは、コスモポリタンの状況に全くストレスを感じていない。

バレンボイムは、「ホーム」の感覚を、彼のいわゆる「調性の心理学」と結びつける。調性音楽には「ホーム」に当たる主調があり、そこから異質の領域に進むが、またホームに戻ってくる。サイドはこれを発展させ、十二の音をばらばらにした新ウィーン楽派を「ホームレス状態」と呼ぶ。そして、秘伝性に傾きすぎた二十世紀音楽は社会と遊離し、権威を失いつつあると考える。一方バレンボイムは、現代音楽を最も積極的に演奏する指揮者の一人なのだ。



ここで、哲学者の客観的な視点と、音楽家の主観的な視点が激しく交錯する。「モーツァルトやハイドンを聴くようにして聴かれることを意図していない人の作品を、プログラムに載せることによって」裏切り行為をしていると断じられたバレンボイムは、「なんでだめなの？」ときく。この純朴さ！「僕は基本的に自分がほんとうにやりたいと思う音楽を演奏し、指揮しているのだから」。明らかに彼は、友の抱く音楽への危機感を共有していない。二人の一番の「相反」は、どちらがこの点にありそうだ。

サイドは、才気と独自性によって境界を越えるバレンボイムをソクラテスやガリレオに譬えているが、私にはむしろ、ワグナーの楽劇の英雄パルジファルのように見える。彼の理想主義、恐れを知らぬエネルギーが、音楽とイスラエルを救うよすがになるといいのだが――。

A・グゼリミアン編、中野真紀子訳、みすず書房・2590円・2014年10月／E・W・Said 35～03年。米の哲学者。D. Bar enboim 42年生まれ。イスラエルの指揮者、ピアニスト。